NAKED EYES YOSHIRO YOMO

PART 2 - 10

INTERVIEW:KOUICHIRO GOSHO PHOTOGRAPH:TOSCIO TOMITA

ファッション・プロデューサー

四方義朗

YOSHIRO YOMO fashion producer

時代の探偵だよ。時代の為に人生を費やしている。

一九四八年大阪に生まれ、大阪に育った四方を生粋の大阪人とは思えない。しかも、法学部を卒業するや就職もせずに、派手派手しい風采のロックバンドを演っていたミュージシャンにも見えない。むしろ対極する生まれ育ちで洗練されたサラブレッドの様である。つまり泥臭さが感じられないのである。

三五歳になる迄、雑誌編集・TV番組制作等の仕事に携わり、1983年サル インターナショナルを設立し、ファッションモデルか俳優並のヴィジュアルで裏方の指揮を執っていた。現在のファッション・イヴェントの企画演出を手掛けるやデザイナーの発するメッセージを、力強いインパクトで伝達するショーイヴェント形式で表現し、デザイナーからの信頼と観客からの喝采をものにした。正に時代を画する演出であった。その脚光は更なる脚光を招き、遂には千を越える国内外のファッションショーをプロデュースすることとなる。

パリコレは知っていても、イッセイ・ミヤケ、コムデギャルソン、サンローラン、エルメス…等のショープロデュースを、この男がしていたことは業界通の者しか知る由もない。パリでの本格的なショーなら一億円はかかると聞く。そのファッションショーは一人のモデルが演じる三〇秒間のドラマであり夢絵巻である。

世界中の視線を集め、モードの演出を操る世界屈指のプロデューサー四方は、次の様に語っている。

「モードが文化であるという認識が日本ではまだまだ足りなさすぎる。」

「若者文化をリードしてきたのはミュージシャンだったし、デザイナーであった。九〇年代では、派手な領域に属さない新しい哲学を持つ普通の人である。」

「トレンドというのは、先回りして落としておくことである。」

「新しいものを生み出せるかどうかは、できあがってしまった自分の形を壊せるかどうかである。」

等々、知的で雄弁で二枚目の彼は軽妙に洞察してしまう。実にキザな男で鼻に付く。醜男のひがみ根性であろうか。生まれ育った浪花の泥臭さを垣間見たいと、気負いを捨てて迫ってみた。

■ **どう見ても恰好ええですね。屁もこけないでしょ。**

最初から恰好いいと言われて喜ぶほど馬鹿じゃねえよ。それと会社ではオナラもしますよ。

あのね、ダセェ奴が汗水たらしてやってると何となく一生懸命感が漂ってて、同じ値打ちの事でも評価が高くされるじゃん。俺の場合一生懸命やってても何かチャラチャラやってる様に見られてしまうよね。ずいぶんハンデを背負ってんだよ。要するに恰好いいことは面倒臭いことなんだ。ただ女性と食事しているだけで、口説いてる様に誤解される如し。

■ **二枚目で恰好いいという自覚があるんですか。**

遅れてきた美男子だよ。

二〇代の頃つけられた仇名が「新東宝」っつうんだよ。映画会社のニューフェイスで典型的男前達を皮肉って言った言葉じゃん。いい比喩じゃないわけ。もうその当時からトレンドとずれてるよ。

俺が恰好いいって思ったのは、その頃だったら、キースリチャードとかああいう不良っぽいの。だから恰好いいと言われてもピンとこない。自覚なんて更々ないね。時代に依って恰好良さは必ず変わってるよ。

■ **モードのオピニオンリーダーとしてマスコミでも活躍してるけど、最近の恰好良さって何。いつだってスーパーモデルはいいよね。**

完璧なものにはセクシーさが欠けていて、隙がないというか、魅力的に感じないだろう。コピーの時代が過ぎて、蝶の様に舞ってる人間でもなく並普通に装ってて独創性を備えた人かな。

端的に言うと、気取ってる超美人より、明るい醜女が売れる時代だ。

■ **価値観の多様化、変遷を感じますね。物を創るのも大変だね。**

洗練されたものと言うなら、カテゴリー毎に一つでいいかも知れないよ。自動車も一台、デザイナーも一人。趣味の良さで極めていったら世の中、モノは一つで済んでしまう。これじゃ世の中面白くない。

京女と東女の衣装対決の話の様に、デコラティブとシックの両方があるから面白い。自分の趣味が良くないというコンプレックスの裏返しがクリエーションなんだよ。だからモノを作るという事は泥臭いことなんだよ。趣味のいい人にはモノは作れない。モノを作る人って、ある意味で悪趣味でないとやれないんだよ。

■ **ファッション・プロデューサーの職業病は。**

何見てもトレンドとかマーケティングになってしまう。食事を味わうより、何故流行ってんだろうと考えたり見たりしてしまっている。自分が楽しめない。だから時代の探偵だよ。時代の為に人生を費やしている。これが嫌だね。

俺の事を世の中では「KIZA」と認識してるなぁと思うけど、抵抗せず、自分の全生活を演出して、そしてどこかで、そう言われて喜ぶ馬鹿の方が楽かなと思ってんだよ。ホント!

カウンターパンチを食らってしまった。「KIZA」(マガジンハウス発行)と言うタイトルの著書があるという。ちゃっかり人を食っているではないか。彼と話してみて実に自然体であることに気付いた。

四方の持つ無心の赤子に似た笑顔が脳裏から離れない。小生の辞書にある「KIZA」という邪気を含む言葉は、彼に関して無邪気という意味にリライトした。

創造の糧となる青春の体験に類似性を持つ彼にライバル意識と発揮能力においてのコンプレックスを抱いていた自分に気付かされた今日。とても大好きになってしまった。(敬称略)

文・五所光一郎
写真・富田敏夫